

Economic Indicators

定例経済指標レポート

指標名：国際収支(11月)

発表日：2006年1月16日(月)

～経常黒字は下げ止まり傾向が明確化～

(No. J - 206)

第一生命経済研究所 経済調査部

担当 副主任エコノミスト 新家 義貴

TEL : 03-5221-4528

		原数値 経常収支				季調値 経常収支			
		前年比	貿易・サービス収支		所得収支	前期比	貿易・サービス収支		所得収支
			前年比	貿易収支			前期比	貿易収支	
				前年比				前年比	前期比
04	1-3月期	43.2	82.9	42.3	9.9	7.4	7.5	2.1	5.3
	4-6月期	20.3	25.3	32.8	13.1	1.2	▲ 4.2	▲ 0.0	8.8
	7-9月期	6.7	10.7	10.5	3.7	▲ 0.1	▲ 1.9	▲ 5.3	2.2
	10-12月期	6.4	▲ 7.2	▲ 9.3	25.6	▲ 1.7	▲ 8.7	▲ 7.4	6.0
05	1-3月期	▲ 8.1	▲ 23.0	▲ 21.4	14.5	▲ 2.9	1.8	1.0	▲ 3.0
	4-6月期	▲ 9.8	▲ 30.4	▲ 29.7	18.4	▲ 3.3	▲ 25.9	▲ 22.0	14.8
	7-9月期	▲ 1.5	▲ 35.2	▲ 31.7	28.5	▲ 0.5	▲ 21.3	▲ 17.2	8.9
04	11月	▲ 17.4	▲ 44.6	▲ 38.5	25.2	11.9	24.2	16.7	0.3
	12月	34.6	13.6	▲ 0.0	52.9	10.8	5.2	▲ 2.1	10.9
05	1月	▲ 27.9	▲ 105.7	▲ 47.5	12.4	▲ 9.9	▲ 0.9	7.1	▲ 7.4
	2月	▲ 3.3	▲ 17.4	▲ 20.6	18.6	5.0	▲ 5.0	▲ 11.1	3.1
	3月	▲ 2.1	▲ 6.7	▲ 9.8	12.4	▲ 17.1	▲ 11.5	▲ 5.3	▲ 12.4
	4月	3.9	▲ 2.4	▲ 7.1	15.2	1.9	▲ 31.1	▲ 20.0	29.4
	5月	▲ 18.6	▲ 63.5	▲ 60.8	27.6	6.8	20.9	▲ 0.7	▲ 5.6
	6月	▲ 14.6	▲ 22.4	▲ 24.4	3.5	4.4	12.3	17.5	▲ 0.8
	7月	3.2	▲ 20.2	▲ 21.8	24.2	▲ 6.9	▲ 32.5	▲ 23.6	9.3
	8月	▲ 16.1	▲ 93.3	▲ 69.4	28.1	▲ 9.4	▲ 11.5	▲ 10.2	▲ 4.8
	9月	6.1	▲ 19.3	▲ 20.8	33.7	26.1	33.1	15.4	16.9
	10月	2.6	▲ 27.3	▲ 29.2	44.0	3.8	21.4	3.5	0.0
	11月	15.1	11.4	0.3	11.2	▲ 6.2	12.8	29.8	▲ 19.8

(出所)財務省「国際収支状況」

○ 経常黒字は下げ止まり傾向が明確化

本日公表された11月の経常黒字額は前年比+15.1%の1兆4,182億円(原数値)となった。事前の市場予想(コンセンサス15,053億円、前年比+22.2%、レンジ12,000~17,500億円)こそ若干下回ったものの、3ヶ月連続で前年を上回っており、下げ止まりが明確になってきている。

今月最も特徴的だったことは、貿易黒字が前年比+0.3%と13ヶ月ぶりに増加に転じたことだ。貿易黒字は2004年後半以降、輸出の伸び悩みと原油価格高騰に伴う輸入増加によって大幅な縮小を続けていたが、このところ輸出の回復傾向が顕著になっていることを受けて、下げ止まりつつある。先行きについても状況は悪くない。まず輸出面では、海外経済が今後も拡大を続けると予想されていることから、引き続き回復が期待できる。また、輸入に関しては高水準での推移が続くと予想されるが、原油価格のさらなる急上昇といった事態も今のところ想定し難いことから、伸び率でみると徐々に鈍化してくるだろう。以上から、貿易黒字は今後、単月の振れを伴いながらも次第に持ち直してくると予想される。これまで経常黒字の押し下げ要因となっていた貿易黒字が持ち直してくることは、経常黒字にとって大きなプラス材料だ。

その他の項目では、所得収支黒字が前年比+11.2%と16ヶ月連続で増加した。前月と比較すると伸びは鈍化し、季節調整値でも縮小しているが、9、10月に急拡大した反動の面が大きいと思われ、特に問題はないだろう。11月は米国長期債の利払い月であることから、債券利子受け取りの数値が振れやすいことも影響したのかもしれない。基調としては、①海外経済が堅調な推移を続けていることから直接投資収益や配当金受取が増加、②対外債券投資の残高が積みあがっていることから債券利子受取も増加、といった要因により所得収支大幅に増加している。こうした状況に当面変化はみられないと考えられることから、この先急激に円高が進むようなことがない限り、所得収支黒字は増加基調を続けていくと思われる。足元における所得収支黒字の規模は、既に貿易黒字の規模を上回るほどに拡大しており、所得収支黒字が経常黒字に与える影響は今後も増していくだろう。2005年度の所得収支黒字額が過去最高額になるのは確実な状況だ。

以上の通り、所得収支黒字の拡大が続くなか、貿易黒字も下げ止まりつつあることから、経常黒字は下げ下げ止まりが明確になっている。2006年以降、経常黒字は緩やかな増加に転じると予想される。

